# 中央アメリカの考古学史

## ——先コロンブス期文化の研究を中心とした——

貞 末 堯 司

1. 序
2. パナマにおける考古学研究史
3. ニカラガにおける考古学研究史
4. マヤ文明の考古学研究史
5. 中・南部メキシコの考古学研究史
6. 結び

## 1. 序

新大陸の古代文明に関する多くの研究，調査の中で，特に考古学的な調査，研究が，先コロンブス期の中央アメリカの古代文明の解明に役立ってきた事例は，かなりの数にのぼっている。

新大陸，それも特に中央アメリカという地域には，アメリカ原住民文明の一つの中心があったことは，既に多くの証拠によって実証されてきたところである。つまり，新大陸古代文明には，二つの中心的高文明が知られており，その一つが中央アメリカに存在し，他は南アメリカのアンデス地帯を中心とする地域に存在したわけであるが，中央アメリカに存在した高文明には，マヤ文明とか，アステカ文明とよばれる，その種族名を冠した文明の存在が知られているのである。しかし，マヤ文明とか，アステカ文明といっても，それら高文明が今日のように世人に認識され，少なくとも，その文明，文化といったものの本質が判明するようになってきた過程については，必ずしも十分に学史的研究が

行われているわけではない。中央アメリカを始め南アメリカ，更には北米大陸のほぼ全域にわたって，18世紀以来，多くの重要な，研究，調査，発掘が行われた。そこには，考古学のみならず，人類学，民族学などの多くの科学の協同作業が必要であったし，それら諸科学の協力によって多くの成果が期待できたのである。後にのべるように，多くの関連諸科学の協同作業によって解明さるべき要因を多くもっている原始文化とか古代文明とかの探求といった作業には，今までに行われた調査，研究，理論の成立といった学史的な知識が常に必要となり，大きな意味をもってくることも当然である。人類の過去の文化に関する研究には，多くの科学の協力を得なければ解明できない点が多い。特に原始時代，古代といった人類の遠い過去を物的資料を手段として復元していこうとする場合，そこには，広範囲な領域にわたっての知識を必要とするのは論をまたないところである。つまり，人類の先祖が残したどんな遺跡でも，その遺跡の解明には，多くの科学或は学問の協力が必要であり，その協力なくしては，到底十分にその遺跡の意味を知ることができない場合が多いのである。そこには，人文科学は勿論，社会科学や自然科学的知識が要求されてくるのである。例えば，遺跡の立地条件は，その遺跡の自然環境論から始まって，人文地理学，地質学，土壌学，などの自然科学の協力をあおがねばならないし，出土遺物については，それが金属器であれば，その成分，製作技術といった冶金学や工学などの知識が要求されてくるのである。同様に人骨などが出土すれば，形質人類学の応援を得ねばならないし，民族学的知識も遺物の性格決定のために必要不可欠の知識ともなる場合が多いのである。

このように，人類の過去を復元する，つまり，人類の過去の歴史的時間の一時期についての歴史的復元作業には，好むと好まざるとに拘らず関連諸科学の協同或は協力関係が存在するということが大きな前提となってくるのである。

しかし，関連諸科学の協力作業によって，人類の過去の歴史的復元を行うといっても，それは主として物的資料に基づいた復元作業である場合が多い。特に過去の文化を復元する場合，先史，原始，古代といった時代の復元には，物的資料が基本的な資料となってくるのは当然である。考古学的調査，発掘は，

正に物的資料の蒐集作業ともいえる。

中央アメリカの先コロンブス期の原住民文化に対して，考古学的調査，発掘が，多くの解明を与えてきたことは論をまたないところであるが，少なくとも現在の時点で，原住民文化を復元する場合，それら調査や発掘の行われた歴史的経過を知ることは，極めて重要なことである。なぜなら学史的な，或は研究史的な知識は，ある一つの調査，発掘などの意味を明確に説明してくれるものであり，それらの意味を知ることは，同時に過去の文化の本質をよりよく知り得ることへの手段であるからである。中央アメリカという細長い，しかも南，北両アメリカ大陸の接続部を形成する地域は，文化的にも民族学的にも更には人種の上からも極めて多くの問題をもつところである。従って，この地域を解明し，同時にこの地域が学問的にどのような径過をもって世人に知られるようになったかを系統的に知ることは，新大陸の先コロンブス期文化の解明のための重要な学問的研究対象でなければならない。

このような意味において，中央アメリカにおける考古学の発達過程について考察をしてみたのが，この論稿である。

## 2. パナマにおける考古学研究史

パナマは，地理的には中央アメリカと南アメリカを結ぶ陸路を形成し，中央アメリカの地峡帯をなす細長い国である。北西部は，コスタ=リカに接し，南は，南アメリカのコロンビアと接している。パナマ運河は，文字通り両太洋を結ぶ動脈で，同国の中央部に存在している。このような地理上の位置からパナマには古くから多くの問題が存在したことも事実である。

16世紀の初頭，スペインのコンキスタドーレスの多くは，パナマを根拠地としてエル=ドラードへの探検にのり出しているが，その中でも1513年に太平洋を発見したバルボア（Vasco Nunez de Balboa）及び彼の部下であったピサロ（Francisco Pizzaro）の二人をあげることができる。バルボアは，パナマのダリエン地方を根拠地として南への探検を計画した。しかし，16世紀初頭のコンキスタドーレスは，言うまでもなく1492年のクリストバル=コロンの大アンテ

ィル諸島発見以来，東洋の黄金国ジパング，そして更に香料諸島への到達を目指していたのである。しかし，バルボアは，太平洋を発見して以来，原住民の首長から南の黄金国の噂を聞き，この国への探検に熱中した。しかし，彼は，新任のパナマ総督ペドラリアスによって反逆罪で処刑されるという悲劇にみまわれ計画は挫折した。バルボアの意思をうけつぎ，黄金国への探検に熱中したのは，南アメリカの歴史に忘れることのできないピサロである。彼は，原住民が語る黄金郷の話を信じて疑わなかったし，バルボアの黄金郷への執着を実現しようと決心したのである。そして，パナマを根拠地として，1528年，遂にインカ帝国の北の町トゥンベス(Tumbez)を発見した。そして，1531～33年とピサロによるインカ帝国の征服は急速に進行し，アンデス地帯に栄えた大インカ帝国も，スペインのわずかな軍隊の前に屈服してしまったのである。ピサロがトゥンベスを発見したのは，コルテス(Hernan Cortes)がメキシコのアステカ王国を亡ぼした年から，わずか8年しかたっていない時であり，インカ帝国の滅亡は，メキシコ征服から10年余りであったのである。

南，北両アメリカ大陸の懸橋的位置にある中央アメリカの特にパナマ地峡部が，16世紀初頭以来，多くのコンキスタドーレスから知られ，彼等にとっては，大西洋と太平洋との両航路を接続し得る重要な拠点でもあったのである。従って，大西洋を横断してきたコンキスタドーレスは，陸路，太平洋岸に出てここで船を建造し，食料を補給し，南の国への情報を手に入れたのである。正に，パナマは，資料蒐集地であったとともに征服への根拠地でもあった。しかし，16世紀のコンキスタドーレスの活躍は，黄金郷への熱狂的な探検心によってもたらされたものであったが，パナマ自体の調査が行われているのも注意する必要がある。これは，1515年に，パナマのダリエン地域に存在した首長墓の一つが，コンキスタドールによってあばかれ，多くの宝石と黄金が持ち去られたという噂である。スペインの征服者達にとっては，パナマに存在した原住民文化への関心とか，興味というものはなかった。彼等が追求したのは，正に黄金であり，文化とか，原住民の宗教とか社会とかは，彼等にとって何の意味をもたなかったのである。従って，ヨーロッパに新しい大陸の原住民文化が正しく知

られるようになってくるまでには，なお，多くの時間が必要であった。事実，コンキスタドーレスが，パナマで16世紀の初頭頃に残した原住民文化への配慮といったものは，何も見ることができない。彼等は，文字通り，パナマを「黄金のお城」(Castillo de Oro) として利用しただけであったからである。

しかし，パナマの歴史は，その後イギリスとスペインの海外競争によって，大きな変動をうけるのである。1572年，ドレイク船長は，大西洋岸の重要港ポルトベロ (Portobelo) とノンブレ＝デ＝ディオス (Nombre de Dios) の両港を占領し，1596年には，この地を首都と定めたが，スペイン軍隊によって追放され，自分の船で病死する。同様に1668年には，ヘンリー＝モーガンがパナマへの遠征を行っている。16世紀から18世紀にかけて，パナマの歴史は，イギリス，スペインの国家間の血なまぐさい関係にみまわれるが，原住民文化についての大きな興味とパナマのもつ地理上の特殊性に関しての種々な研究がおこってくるのは，19世紀から20世紀にかけてである。

先コロンブス期のパナマ原住民文化に対する興味と関心は，新大陸古代文明の中心が，中央アメリカのメキシコと南アメリカのペルー，ボリビアを中心とするアンデス地帯に存在したという事実から発したといっても過言ではない。換言すれば，新大陸の古代高文明は，カリフォルニアとか，アマゾンとかにおこらずに，何故メキシコやペルーにおこったのだろうか，という素朴な疑問が出発点になり，次に，これら二つの地域の文明は，相互にどのような関連をもつていたのか，また，相互に関連なしに発展したのか，という疑問へと発展した。そして，その後メキシコ谷で鐙型土器が発見され，それが，ペルーのチャビン (Chavín) 式土器や北部海岸地帯に発見される鐙型土器と類似した点をもっていることが判明すると，この両地域の文化的な相関関係，或は文化的な交流や影響の存在といったような問題をどのようにとらえればよいのかといった論争へと発展していったのである。また，メキシコのオルメカ (Olmeca) 文化に特徴的なアメリカ豹信仰，特に猫科獣への信仰とでもいえるオルメカ的要素は，広大な地域に広がるとともに，古い時代のペルーにも導入されたのではないか，といった精神文化への疑問となって，大いに世人の注目をひくようにな

った。このように二つの中心的な文明の中間地帯に位置し，しかも両者の懸橋的な地帯であるパナマに関しては，この地峡地帯を通って，北から南へ或は，南から北への人間の移動があったであろうし，同時に両文明がもっている前述の如き疑問に正確に答え得るためには，パナマをはじめとする中央アメリカ地峡地帯の研究がなされなければならないと考えられるようになったのも当然のことといわねばならない。

この問題は，更に大きな問題設定へと発展し，特に人間がパナマの地峡地帯を渡渉し，南から北へ，北から南へと交流した証拠の調査へと多くの努力を集中させることになった。また，パナマの原住民文化は，両文明からどのような影響をうけたのか，また，どのような影響を一番強くうけ得るのかといったパナマ原住民文化自体への研究へと発展していったのである。そして，スペインの征服当時もそうであったように，パナマは，南，北両アメリカ大陸にとっていずれの側に行くにも極めて大切な地域，つまり両大陸の古代文明が，文化的な交流を行い得るとすれば，この地域をおいて他にないのではないかといった問題が提起されるようになったのである。

このように，スペインの征服以後，動乱の歴史を経て，ラテン＝アメリカ諸国のうち，特に中央アメリカの諸国，それも，メキシコやガテマラなどの高文明の存在した地域を除く諸国には，原住民文化の問題に関しては，「中間地帯」としての特殊性を考慮しなければならない，といった点が先コロンブス期文化の研究に対して大きな前提となった。

パナマは，以上のような意味では正に中間地帯であり，そして，これらの問題の解明のためとも考えられる調査が，20世紀の初頭から特に多くパナマで行われるようになった。1920年代から30年代に及ぶ約20年間に，考古学上の調査のいくつかは，このパナマを含んだいわゆる中間地帯に集中した。これらの調査の中で，パナマで行われた重要な二つの発掘調査の例を述べておこう。

第一のものは，1924年，ベリル（A. Hyatt Verrill）によって報告されたものである。[①] 彼は，ニュー＝ヨークのアメリカインディアン博物館の資料蒐集のためにパナマにやってきていたが，この時，原住民が，今までにパナマで知られ

ていなかった特異な先史時代の土器をもってきた。彼は，原住民の案内でこの土器が出土した太平洋岸のコクレ（Coclé）へでかけ，ここで今までに誰も知らなかった石彫品を発見した。この遺跡は，宗教上の広場をもっていたが，石彫品は何列にも並び，しかも男根崇拝を示めす男根彫刻列という，極めて特異な遺跡であった。この時，彼は，ごくわずかな発掘を行ったようであるが，墳墓や黄金製の道具などは発見していない。しかし，石彫品とともに彼は，多彩色の莫大な量の土器破片を発見し，彩色形象土器も採取した。形象土器は，人間，動物を形どったものが多く，これらは，ペルーの北部海岸に発見される形象土器と極めて類似するもので，彼は，コクレ彩色土器文化とペルー海岸地帯文化との類似性と交流の存在を認めている。

ベリルのコクレ調査は，正式な調査とはいえない面をもっていたが，彼が，原住民のもってきた彩色土器の特殊性を敏感に察知し，すぐに調査に行って古代原住民文化を紹介したことは，その後の同地域の調査，研究に先鞭をつけたものとして大きな意義をもっている。

第二のものは，1933年から34年にかけて行われた，ラースラップ（Samuel Kirkland Lothrop）博士と夫人（Eleanor Lothrop）の行ったコクレの調査である。[2] この調査は，大きな成果をあげ，アメリカ考古学の一つの金字塔を打ちたてたものであったといっても過言ではない。博士の調査した遺跡は，コクレ州のグランデ川に臨むシテイオ＝コンテ（Sitio Conté）と名づけられた遺跡である。この遺跡は，巨大な墳墓が重層的に発見され，パナマ地域の特殊な墳墓文化の全容を示すものであった。

ラースラップのシティオ＝コンテの調査は，結論的に言って，三つの点が注目されなければならない。一つは，古代墳墓の形状の特殊性である。二つは，墓室内の埋葬儀礼の特殊性である。三つは，発見された大量の遺物から，この地域が，南と北からの文化の影響を強くうけていることを物語っているという点が判明したことであった。第一のパナマ古代墳墓の形状は，1930年代に知られていた他の地域のどんな墳墓の形状とも異ったものであった。墓壙は大小様々であるが，平均的には2.5m内外のシャフトをもって土中に掘り凹められて

いて，深さは，まちまちである。しかし，深い墓壙程，副葬品の数が多く，大きくて深い墓壙程，殉死者も多数にのぼり，首長墓的な様相を呈していた。例えば，墳墓26に認められるように，21人の殉死者が殆どすべてうつぶせに埋葬され，墳墓の主人公は，そのほぼ中心部に蹲踞姿勢で埋葬されているが，これなどは特殊な埋葬儀礼をもつものと考えられる反面，墓壙の径は，約4.5m×2.5mと大きく，多くの副葬品をもつものであった。また，墳墓構築の特殊な方法も注意された。それは，墓壙の基底部にしばしば亀の甲が敷きつめられ，亀甲を固定するために，その上に土がかぶせられ，更にその上に大きな平石がのせられるという作り方であった。遺骸や副葬品は，この平石の上におかれるのが普通であった。このような墳墓群の特殊な形状，構築法は，南アメリカの墳墓の習俗とも異り，同時にパナマより以北の墳墓の形状とも異なっているところから，ひじょうな注意をひくこととなった。墳墓群の発掘によって，パナマの死者埋葬儀礼には，一つの特殊性があることが判明した。それは，殉死の制とも考えられるものであるが，主長の死には，妻ないし臣下，奴隷の殉死が強制された如くである。特に前述の墓壙26の例を最高として，二ないし数体の遺骸の同時埋葬が発見されていることは，このことを物語っていよう。しかも，これら遺骸は，平石の上に多くの副葬品とともに埋葬されている例が殆どであり，パナマ地方の特殊な葬制を知ることができる資料であった。また，出土遺物の性格は，重要で，特に遺物の中で注目されるのは，黄金製品である。黄金製品は，パナマ独得な意匠をもつが，文様表現や形状からは，ペルーのチョンゴヤッペ（Chongoyape）やチムー（Chimú）の金製品と類似している点が指摘される。また，護符的な人像や動物像の鋳造金属製品の多くが発見されているが，これらは，明かにコスタ＝リカやメキシコ南西部の鋳造金属製品に類似しており，このような点から考えると，パナマは，正に両高文明の中間地帯としての文化的な特質をもった地域であったことを判明させるものであった。

1965年，ラースラップは，考古学者としての数奇な一生を終ったが，彼の仕事は，1940年，メイスン（John Alden Mason）によって引継がれ，成功裡にその調査も終了した。

## 3. ニカラガにおける考古学研究史

パナマの北西には，コスタ=リカ，ニカラガ，ホンデュラスといった諸国があるが，これら中央アメリカ諸国の中でもニカラガの先コロンブス期原住民文化は，極めて特異であり，多くの問題をもっている。[③]

ニカラガの考古学的資料は，主に石彫品と土器であるが，その中でも特に石彫品に多くの問題がある。ニカラガの考古学的地域，つまり原住民文化が発現したところは，マナグア湖，ニカラガ湖の周辺地域と，これら二つの湖と太平洋との間に存在する，いわゆるチョンタレス（Chontales）州を中心とした，シエラ=アメリク山塊の細長い西斜面一帯である。これらの地域には，いわゆるアルター=エゴ（Altar Ego）様式[④]の石彫品が発見され，この種石彫品とメキシコホンデュラス，コスタ=リカなど，ニカラガの北方，南方に存在する石彫品との文化的な関係が問題になったのである。特にニカラガのアルター=エゴ様式の石彫とチョンタレス式石彫との相違は，前者がメキシコ系或はマヤ系の石彫と同一ないしは，極めて類似した一面をもっているため，マヤ文化圏とニカラガ石彫文化との直接的な関係をとく人もいたが，後者は，ニカラガより以南に多く発見され，アルター=エゴのモチーフをもってはいるが，必ずしも中央アメリカに特徴的なものではなく，むしろ，南アメリカの石彫文化と類似した点が注目されるものである。つまり，チョンタレス石彫様式は，南アメリカ，コロンビアのサン=アグスチン（San Agustin）文化[⑤]と共通した一面をもつと考えたほうが，北方のメキシコ，ホンデュラス，エル=サルバドルなどの石彫と類似すると考えるよりは，はるかに正当性をもつと考えられるからである。

ニカラガやコスタ=リカ，パナマなど中央アメリカの地域は，考古学的調査，発掘は必ずしも多くなく，その資料にもある程度の制限はあるが，中南米古代文明の中間地域という意味で，今迄に多くの関心を集めてきているのも事実である。そして，先述したパナマにおけるシティオ=コンテの調査を始めとしてニカラガにおいても，古くから前述の特異な石彫品及び特殊なニカラガ土器の存在は，学者の注意をひいていたのである。

ニカラガの特異な石彫品に多くの注意を払い，同時に石彫品の多くを本国に送って研究の資に供しようとしたのは，アメリカ合衆国のニカラガ大使であった，スキール(George Squier)であった。彼は，1850年から51年にかけて，駐ニカラガ，アメリカ大使として活躍した。そして，ニカラガの運河開発計画に関連して彼は大きな権限を委譲され，中央アメリカ諸国にかなりの影響力をもった大使でもあった。同時に彼は，反英思想の持主であったため，ことごとに英国と反目したが，これがかえって中央アメリカ諸国から愛されることになり彼の行動を極めて自由なものにしたのである。彼は，ニカラガ国内の自由旅行権や調査権を得たし，同国内のどんな所でも発掘し，遺物を蒐集することができた。彼は，ニカラガ全土を調査し，ニカラガの古代原住民文化についての最初の二巻の研究書を公刊した。[6] この研究書は，ニカラガの古代文化にとっては特筆すべきことであった。というのは，スキールは，初めて総合科学的な調査方法に基づいた研究法をとったからである。特に彼が，ニカラガの調査，研究で協力を求め，同時にその研究成果に大いに期待した学問は，地理学，地形学，経済学，歴史学，民族学の多きに及び，これら諸科学が協力してこそニカラガの古代文化の解明は可能になると力説しているのである。外交官であった彼は中央アメリカの考古学と言語学の分野に突然と，しかも広い視野をもって劇的な出現をした偉大な人物であった。彼が外交官であったことは，いろいろな意味で功罪があったが，彼は常に中央アメリカの先史文化に対して，大きな理解と興味を抱いた人物であり，彼の心の中には，先進国としてのアメリカ及びヨーロッパ，特にスペインなどで，アメリカ原住民の古代文化については，何一つ知られているわけではなく，唯コンキスタドーレスの蹂躙にまかせ，古代原住民文化は，今や憂慮すべき状態にあること，新大陸を征服したヨーロッパの国々は，原住民文化の伝統を末永く保存し，そのための国家的方針を立てるべきであることなどを強調した。彼は，「古代文化に関するすべての質問に対して答えてくれるのは，素足の原住民の召使い達であり，彼等が，自分達の先祖の残した文化に対しての紹介や知識は，驚くべきものである。それにくらべて，グラナダの最もよい教育をうけ，知識も広いといわれる，神父とか，町長や行

政官達は，何も原住民の古代文化について知っていない。先コロンブス期文化に対する経験と知識の面では，原住民の召使いの方が，はるかに進んでおり，彼等から欧米の人間は，大いに学ぶべきである」と述懐している。

スキールのニカラガにおける考古学的研究や調査は，彼がニカラガを調査した時よりは数年前に行われたスティーブンスのマヤ地域の調査旅行のニュースが，ひじょうに大きな影響を与えたことも事実であった。マヤ文明の本拠地に入ったスティーブンスは，画家のキャザーウッドとともにマヤ文明の姿を絵入りで出版し，マヤ文明の壮大さとその神秘性を欧米に紹介した。このことは，ヨーロッパ文明が，19世紀の中頃までにもっていた本質とか，更には，ヨーロッパ流の思考の形態が，新大陸の原住民古代文化によって反省を求められ，新しく，問い直しを受けることにもなったのである。このような文化的刺激は，ヨーロッパの文化に酔いしれ，同時にヨーロッパ流の政治，経済，社会制度といったものへの痛烈な批判をよびおこす端緒ともなったのである。スキールは，マヤ地域よりは，中間地帯としてのニカラガを選び，考古学的には，全くの処女地であった，マナグア湖とニカラガ湖の中の島々を調査地として選定した。そして，ニカラガ湖のサパテロ（Zapatelo）島に精力的な調査を行ったのである。サパテロ島の調査は，彼に多くのものをもたらし，その後の中央アメリカ古代原住民文化の研究に大きな貢献をした。スキールのサパテロ島調査によって，アルター=エゴ様式の石彫が発見されたのを嚆矢として，今一つ，驚くべき彫刻群が発見される契機がつくられた。それは，メキシコ湾岸から発見された硬玉製のテュクストラ（Tuxtla）石彫の表面の浮彫と同様の浮彫をもった石彫が発見されたことであった。

テュクストラ石彫というのは，硬玉製で，極めてユニークな形象石彫であるが，表面には，マヤ式暦と数字が彫刻され，全体的には人像彫刻である。しかし，その人面の口の部分が，「あひる」「がちょう」の類の唇として表現されたもので，古くから，その特異な彫刻が問題になっていたのである。スキールのサパテロ島の調査を契機として，テュクストラ石彫の唇部分と同様の浮彫をもった石彫が発見されるようになり，これと類似の石彫は，ニカラガの高地帯から

も発見，報告されるようになった。

これらの石彫品が，ニカラガから発見されると多くの論争がおこった。というのは，テュクストラ石彫の意味自体が，まだ，判然とせず，マヤの数字表記がメキシコ湾岸のベラクルス周辺にまで拡大していたと考えられる根拠が曖昧であること，また，オルメカ系文化との関係が不明な点が多く，結論がでていないといった事情から，ニカラガ発見のテュクストラ様式の石彫は，どのように解釈したらよいのか，が不明であったからである。

このような問題に対して，一つの結論を与えたのは，パナマのシティオ=コンテの発掘者，ラースラップ博士であった。彼は，ニカラガの石彫は，アルター=エゴ様式，テュクストラ様式を含めて，チョロテガ（Chorotega）族のものであると推定した。彼は，中央アメリカでは，メキシコから入ってきたナウトル（Nahuatl）語を話す種族と，南から入ってきたチブチャ（Chibcha）族とが，ニカラガ，コスタ=リカに住むようになる，はるか以前に，明かに北から入ってきた種族のチョロテガ族が住んでいた。彼等は，マヤ人より，はるか以前から中央アメリカにも居住し，同時にホンデュラスのコパン地域にも居住していた。従って，ニカラガに発見される石彫は，明かに，これらマヤ地域の中で非マヤ的な石彫と考えられるものと，極めてよく類似するわけで，これらは，基盤的な文化としてのチョロテガ文化であると考えたのである。彼の説によると，コパンの非マヤ石彫とニカラガの石彫とは，相関関係をもつもので，チョロテガ文化の特長を最もよく表現したものである，というのである。しかし，ラースラップのこの説には，多くの反対がおこってきた。というのは，テュクストラ様式の石彫の浮彫に対しては，彼は何も説明していないし，このような決定的とも考えられる石彫品についての論理的説明がない限り，チョロテガ種族論は，認められないとしたのである。

スキールの19世紀中頃における調査は，多くの問題を中央アメリカの原住民古代文化の解明の上になげかけたが，その後，ニカラガの，特にアルター=エゴ様式やチョンタレス様式の石彫に関しては，南アメリカからの強い文化の伝播，影響のもとにこれらが形成されたとする説が強くなった。特に南アメリカ

コロンビアのサン=アグスチン文化，更には，ペルーのチャビン，ティアワナコ（Tiahuanaco）文明の影響を認め，これら諸文化の影響下に形成されたとする説が説得力をもっている。また，サパテロ島のアルター=エゴ様式の石彫は，ペルーの海岸地帯の土器の影響によって生れたとする説も有力であり，中央アメリカ古代文化は，北からよりは，南からの文化の影響によって形成されたとする説が有力である。

このように中間地帯といえる，ニカラガの古代文化論争は，正に，19世紀中頃に行われたスキールの活躍と研究とに，その根源があったといえよう。

## 4. マヤ文明の考古学研究史

メキシコのユカタン半島やガテマラ，ホンデュラスの北西部一帯にかけたジャングル地帯に，マヤ文明の本拠があったことは，周知の通りであるが，16世紀初頭のスペイン人の侵入時には，既にマヤ文明の衰亡は歴然たるものがあり，スペインの侵入者達もマヤ文明の存在そのものには，さして関心もなかった。しかし，1576年，スペインの官吏パラシオ（Diego Garcia de Palacio）は，コパン遺跡に入って，その文明の様相の一端をスペインのフィリップII世に書き送っている。また，リオ（Antonio del Rio）は，1786年，カルロスIV世にパレンケ（Palenque）遺跡について報告している。また，1807年には，デュポー（Guillelmo Dupaix）が，カスタニェーダ（Luciano Castañeda）とともに南メキシコを調査して，マヤ文明の片鱗を報告しているが，19世紀の初頭になって，マヤ地域への調査，研究は，にわかに活発になってきた。特に，フンボルト（Alexander von Humboldt）の中米及び南米への調査が開始されたのを契機にワルデック（Jean Fréderic Waldeck）やキングスボロー卿（Kingsborough）の調査があったが，これらの中で，特筆されるべきものは，スティーブンス（John Lloyd Stephens）のコパン（Copan）遺跡の調査をあげることができよう。

1839年スティーブンスは，ニュー=ヨークから英領ホンデュラスのベリス港に，マヤ遺跡調査の第一歩を印した。彼は，英国の画家，キャザーウッド（Fre-

derick Catherwood）をつれていた。このことは，その後のアメリカ考古学に重要な意味をもってくる。というのは，画家キャザーウッドの精密画ともいえるマヤ遺跡の描写は，マヤ文明の何たるかを少なくとも19世紀の初頭の人達に具体的に示してくれるものであったからである。コパンで彼等は，彫刻のある11本の巨大な石碑，象形文字，豹の頭部の彫られた巨大な石彫，玉座，ボール=コート，宮殿建築，ピラミッド遺構，2500個もの象形文字が描かれた主階段遺構など，ジャングルに沈んではいるが，往年のマヤ文明の繁栄をいかんなく示してくれるものを発見したのであった。二人は，コパン遺跡を50ドルで購入したが，マヤ文明の都市遺跡は，ここばかりではなく，更にキリガヤ（Quiriguaya）パレンケと足をのばし刻明にマヤの大遺跡を収録していった。そして，ユカタン半島の北端部に近いウシュマル（Uxmal）遺跡に足をのばした時スティーブンスは病気に倒れ，アメリカへ帰らざるを得なくなったのである。そして，1841年から翌年にかけての二年間，彼らは再びウシュマルを訪問し，更に，今日最もよく知られている，マヤの一大宗教都市，チチェン=イッツア（Chichen Itza）にまで，その足跡を印したのである。

ホンデュラスのコパン遺跡の調査から始って，彼等がマヤ地域で訪問し，収録した，マヤの遺跡の数は，44か所の多きにのぼり，彼等の旅行記は，1841年には既にキャザーウッドの刻明な絵入り本として出版された。この本は，三巻に及ぶ大部の本であったが，すぐにベスト・セラーになり，英，独，西語に翻訳され，現在でも読まれている。[7]

スティーブンスのマヤ地域の調査は，その後のマヤ学興隆への基盤であった。これを契機にして多くのマヤ研究者が輩出することになる。

スティーブンスは，1852年，その数奇な一生を終ったが，その数年後，1860年にマヤ学にとっては忘れることのできない本が出版されている。“Relación de las Cosas de Yucatan”（ユカタン事物記）と邦訳されているこの本は，16世紀のスペイン軍侵入時，カトリックの神父としてメキシコに来て，カトリックの布教にあたるとともに，マヤの古記録，マヤ古来の宗教を破壊した神父としても有名であるランダ（Diego de Landa）神父が書いたものであった。彼は，

マヤの事物に関することを彼流に書き残したのであったが，ボルボージュ(Abbé Brasseur de Bourbourg)によって，出版されたのである。この本は，その後のマヤ文字の解読の基本文献ともなり，また，16世紀初頭のマヤに関する一等史料となったものであった。

スティーブンスの本が出版され，更に，ランダの本が出版されて，大いにマヤに対する理解と関心が高まった時，チチェン=イッツアの「犠牲の井戸」の調査に情熱を傾けた人が現れた。その人は，タムスン(Edward Herbert Thompson)である。この井戸に関しては，古くから種々な論議があったが，タムスンは，潜水夫を使って井戸をさらい，貴金属，硬玉，土器，織物の破片など多くのものをすくいあげた。この調査は，1890年に計画がたてられてから，1904年から1907年にも行われたが，その後，第1次大戦がおこるに及んで，メキシコのカランサ(Carranza)政権は，タムスンに金持ち出しの疑いをかけたので，彼はアメリカに逃げ帰り，二度とメキシコの地を踏まなかった。チチェン=イッツアの井戸の調査は，その後，多くの学者によって再調査され，ユカタン低地マヤ文明の本質的なものが明るみにでることとなった。[8]

1916年，ガテマラのペテン低地の一大マヤ=メガロポリスとよばれた，ティカル(Tikal)の遺跡の北東24kmのワシャクトウン(Uaxactun)で，マヤ暦の最古の日付をもつ石碑が発見された。この発見者こそマヤ学の泰斗，モーレイ(Sylvanus Griswold Morley)であった。彼が発見した石碑9の碑文の暦は，現在のグレゴリオ暦に換算すると328年4月9日の日付をもつといわれるものであるが，この発見によって，ワシャクトウンの遺跡は，ワシントンのカーネーギ財団の遺跡調査の対象遺跡となり，1924年，大規模な発掘がモーレイの指導のもとで行われることになった。そして，この調査によって，ペテン=マヤ文明の層位と編年が確立され，マヤ文明の歴史的な経過は，より一層明確になった。そして，この継続調査は1938年に遂に一つのピラミッドの中に存在した，前のピラミッド，Pyramid E VII. sub. を発見したのである。このピラミッドは，四方に主階段をもつが，いずれも漆喰で被覆され，階段の上部には，アメリカ豹の顔がリアリステックに漆喰で造形されていた。このことはマヤ文明の

基盤には，オルメカ文化が存在するのではないか，といったマヤ文明成立の基本問題に一つの重要なヒントを与えることとなった。

20世紀の初頭，カーネーギ財団は，マヤ地域で多くの遺跡の発掘調査を行った中に，チチェン=イッツアの遺跡があることを忘れてはならない。この調査は，ワシャクトウンの発見者であったモーレイが指揮をとったが，実際の発見者は，モリス（Earl H. Morris）であった。また，この調査団は，メキシコ政府とカーネーギ財団との取決めで，10年継続調査が保障され，バイラント（George C. Vaillant），ルパート（Karl Ruppert），タムスン（John Eric S. Thompson）などの学者が参加した。この調査によって，チチェン=イッツアの勇士の神殿が発掘調査されるとともに，神殿内の壁画，彫刻などから，トルテカ（Tolteca）人の侵入やメキシコ中央高原文化の侵入などについて多くの事実が判明した。

マヤ地域における20世紀最大の発見ともいわれ，同時に，マヤのピラミッド建造物の性格を決定するのではないかとも考えられる調査と発見が行われたのは，マや研究史の上から忘れることのできない出来事であった。

第2次大戦も終った1949年，メキシコ国立人類学，歴史博物館は，ルイジェール博士（Alberto Ruz Lhuiller）をパレンケ遺跡調査の主任に選出した。パレンケ遺跡は，メキシコのチャパス州にあり，ウスマシンタ川の流域で多くの建物群とともに，建物の表面には，マヤ古典期以後からの漆喰彫刻が残っており，ピラミッド神殿や四角柱（四層）の天文観測塔など，マヤ文明の粋を集めた荘麗な都市遺跡であった。多くのピラミッド神殿の中でも，特に「法律の神殿」は最も大きく，この神殿の発掘は，1949年から1953年にかけて行われたのである。博士は，この最大の神殿の構築技法，神殿内部の空気孔，ピラミッド内部につくられた階段，パレンケで発見された持送りアーチの天井をもつ墳墓の構築技法等の調査を十分に行うべく努力をしたのであるが，実は，この調査中に，この法律の神殿は，その頂上に神殿をおいている点は，他のマヤの神殿ピラミッドと同一様式をもっているにしても，その内部に，しかも頂上部からピラミッドの内部に作られた階段によってピラミッドの最下底に到着することが

でき，その基底部に巨大な墓室をもっているものであることが発見されたのである。このことは，マヤのピラミッドは，エジプトのファラオのピラミッドと違って，墓ではなく頂上に神殿を置くための基台的役割をもつにすぎない，という従来の定説ともいえる説を否定するに十分な迫力をもった発見であった。この発見は，更にもう一つの重要な結論をもっていた。つまり，発見された遺骸は，マヤ人の平均身長より，はるかに背が高いこと，つまり，彼は，マヤ以外の他の国からやってきた人ではないか，と考えられるという博士の結論であった。しかし，発見された遺骸だけで，それが非マヤ人であるか，肉体的に非原住民（非アメリカンインディアン）の特性をもっているかどうかは，現在のところ，明確な断定は下せないのである。ただ，ここで注意されるべきことは，前述のE．H．タムスンは，既に1896年，チチェン=イッツアの一ピラミッドの中心部の空洞に入っていき，地表下の空洞の中に，彼の言葉をかりれば，「高い身分の神官」の墓が存在していた，ということを述べていた。しかし，彼のこの知見に対しては，当時の学者達は，一顧も与えず無視したが，博士は，パレンケの調査を行うことになった時に，既にタムスンの見聞をひじょうによく覚えていたし，考慮せねばならないことであると考えていたのである。従って，法律の神殿の内部に階段を発見し，階段を埋めた石をとり除きながらタムスンの知見の正しかったことを確認していったのである。

博士のこの発見は，現在，マヤのピラミッドの性格を決定する重要な資料となり，マヤ学の重要なテーマの一つになっているといっても過言ではない。[9]

20世紀の中頃，水中での活動は，アクアラングの発明によって，ひじょうに楽になった。この機械は，同時に考古学の分野においても，大きな貢献をしたのである。従来，地中海に沈んだ古典古代の船の調査とか，新大陸では，前述のタムスンのチチェン=イッツアのセノーテの調査とかは，すべて大がかりな潜水装置を使って行われていたのだが，アクアラングの発明によって，誰でも自由に水中に潜り得たうえに，数人のフロッグ=マンの活動で，水中での仕事を十分に行うことができるようになった。1954年，ガテマラのアマティットラン（Amatitlán）湖が，数人のガテマラの青年によって調査された。この時，湖

の南西部から，古代の壺が発見された。これを契機として，1957年の夏ハンガリーの考古学者，ボルヘジイ（Stephan F. Borhegyi）博士は，ガテマラの高地マヤ遺跡を調査していたが，アマティトラン湖からもたらされた古代の遺物を手にした。これは，考古学的に極めて興味のあるもので，マヤは勿論，トルテカの神を現わす像や土器，香炉などが主であったため，博士は，この湖の調査を決心したのである。1958年，博士は，湖の周辺に多くのマヤの小遺跡を発見したが，特に注目をひいたのは，9箇所の湖上住居址であった。また，神への貢献物は，必ずといっていいくらい，間歇泉の側とか，熱湯の湧き出ている所とかにおかれていて，温泉が，古くからマヤ人達にとって，特別な意味をもつものであったことを物語っていた。また，貢献物の多くは，紀元前と推定されるものから，スペイン侵入時頃までのものまであり，湖の周辺で，マヤ人達が行った湖への宗教的儀礼を物語るものであった。こうして，アマティトラン湖は，カミナルフユウ（Kaminaljuyú）遺跡程ではないにしても，マヤの貴重な遺跡群をもった場所と考えられるようになった。また，この調査で，博士は，マヤ貢献物の奉献の仕方を推定している。ここでは，チチェン=イッツアの井戸のように，直接，水の中に奉献物を投げ込むのではなくて，最初は，水辺に置かれているが，波がたったり，風が吹いたりして，物が次第に水中に没していくのを待つようである。また，湖水の神に対してばかりでなく，湖水に流れ込んでいる熔岩流の上にも，怒れる火の神に捧げられたと考えられる品物が多く発見された。

ボルヘジイの調査によって，アマティットラン湖には，13か所のマヤ人の宗教儀式に使用された水中遺跡が判明し，11か所の湖畔遺跡が発見された。このことは，水中考古学によって，従来，等閑視された部門にも重要な資料が存在していることを知らしめる重要な調査でもあった。

先コロンブス期の新大陸の文化の中で，マヤ文明が一きわすぐれた特質をもっているのは，文字を所有していることであった。南米のインカ帝国内に発見されるキープ（Quipu）とか，トルテカ，アステカ（Azteca），サポテカ（Zapoteca）といったメキシコの古代諸文明に存在した，絵文字などに比べて，マ

ヤの象形文字は，完全に文字であり，思想や意思が伝達されているのである。しかし，現在，マヤ文字は，約その$\frac{2}{3}$が未解読であり，解読されている$\frac{1}{3}$も，主に暦とか天文に関係した文字であり数字である。マヤ文字の解読には，マヤ文字の基本資料やマヤの宗教体系を破壊したといわれる神父，ランダの「ユカタン事物記」が皮肉にも使用され得る貴重な文献となっているが，マヤの編年，マヤ人の時間への執着，恐るべき正確な天文に対する知識の一端は，すべてランダの，この本によって，知られるのである。つまり，マヤ人の慣習や偶像崇拝にもとづく，天文，暦，時間の処置といったものは，ランダの知見によって，現在に再現され得るにすぎなくなっているのも事実である。

多くのマヤ学者達が，この本を基礎にして，マヤ文字の解読にあたってきたが，マヤ文字に関しては，一つの結論めいたものがでていた。それは，マヤ文字は，天文観測や天体運行に関することや宗教儀礼上の内容を述べたもので，歴史的事実やマヤの歴史資料を述べたものではない，ということであった。特にS．G．モーレイやJ．E．S．タムスンなど，マヤ学の今世紀最大の権威といわれる人達も，そのように確信していた。モーレイは，マヤ文字は，どんな意味においてもエジプトやバビロニアなどの碑文のように讃美の文章を綴っているのではない。また，王の支配の歴史を述べているのではない，と述べた程であった。1960年，上記のような従来のマヤ文字やマヤの碑文に対する定説に，まったく反対の解読が行われるという，新しい発展が見られたのである。

1960年，プロスコウリアコフ（Tatiana Proskouriakoff）女史は，ガテマラのピエドラス=ネグラス(Piedras Negras)遺跡のマヤ石碑の碑文の中に，現実の王と，その夫人達や子供達のことを書いた部分，出生の日付，即位の日付などが書かれた碑文を発見し，解読した。[10] これは，正に彼女以前のマヤ文字学を支配した悲観主義的な考え方を打破するものであった。同時に，ランダの本が発見されて以来，突破することができなかったマヤ文字解読のための突破口が，ここに開かれることとなった。J．E．S．タムスンは，マヤ王朝史は彼女によって開かれ，今後更に，マヤ王朝の家族生活や支配組織などが明かにされるであろう，と彼女の成功を賞讃した。

しかし，マヤ文字が現在，すべて解読されているわけではなく，彼女の成功は，確にマヤ学に新しい，一ページを加えるものであるが，ピエドラス=ネグラスは勿論，更に，チチェン=イッツア，ボナンパック（Bonampak），パレンケなど，マヤの大宗教都市には，なお多くの碑文が，その解読される日を待っているのも事実である。

## 5. 中・南部メキシコの考古学研究史

1519年，コルテス（Hernan Cortes）のメキシコ征服軍は，アステカの首都，テノチティットラン（Tenochititlan）に到達し，運河，寺院，宮殿，大ピラミッドのある，その大都市を落し入れ，すべてを破壊して，メキシコ征服を完成したが，その後，植民地政策が行われた中でも，18世紀の終り頃から現在のメキシコ市を中心とした地域で，先コロンブス期の石彫や石碑，神殿址などが発見されるようになった。その中でも，直径4m，重さ約20屯の一枚石のアステカの暦石の発見は，特筆さるべきであるが，先コロンブス期の原住民文化について，メキシコの中央部で組織的な調査が行われるようになったのは，1803年のフンボルト（Alexander von Humboldt）のスペイン軍征服路の調査に関して行われた，原住民の古代文化調査である。彼は，この時，メキシコ市の中心部のソカロ（Zocaro）広場からアステカの石彫を発掘しているが，実質的に先コロンブス期の文化の調査が欧米人に知られ，その内容に関心を高めたのは，バロック（William Bullock）の調査であった。彼は，メキシコ近郊のテオティワカン（Teotihuacam）やチョルラ（Cholula）のピラミッドなどを調査し，ここから多数の発掘品を得ている。後に，この発掘品は，ロンドンのピカデリーのエジプト=ホールで展覧され，ヨーロッパに広くアメリカ原住民文化を紹介する端緒になった。

1850年から60年代のメキシコ中央部では，フランスのシャルネイ（Désiré Charnay）が活躍している。彼は，フンボルトやプレスコット（William Prescott）の業蹟に対して，早くからテューラ(Tula）のトルテカ族の本拠に注意を払い，約1500kmはなれた，ユカタン半島のチチェン=イッツアにトルテカ文化が移植

され，トルテカ=マヤ文明ともいえる様式が，チチェン=イッツアに認められることを指摘している。また，彼は，新大陸で最初の車輪付玩具を発見した。これは，ポポカトペトル山の約3900mの高所にある墳墓の副葬品であったのであるが，出土地点の異常性と新大陸には，車輪の回転運動を応用した車は存在しなかったという定説があって，彼の発見は，永く無視された形になっていたが，バイラントが，1930年に同地を再調査して，その玩具の存在を確認した。その後，車輪付土偶，玩具は，トレス=サポテス（Tres Zapotes）やクルワカン（Culhuacán），モンテ=アルバン（Monte Albán）などからも発見され，現在では，車輪付玩具は，先コロンブス期原住民の独得な遊び道具であり，A. D. 300年頃から900年頃までに存在したことが確認されるようになった。しかし，回転運動の原理は，荷物運搬用の車輛として応用されることはなかったのも，新大陸の古代文明の特殊性を物語る一面であろう。

シャルネイのマヤ=トルテカ様式への注意と車輪付玩具の発見は，その後のメキシコ中央高原の考古学的研究の大きな促進剤となったのである。

メキシコ中央高地及びメキシコ谷での調査は，20世紀の初頭以来，盛んになってきた。1907年，ナタル（Zelia Nuttall）女史は，ペドレガル（Pedregal）地帯から古拙スマイルをもった人形土偶を採集した。彼女は，これら土偶を熔岩採掘場から発見したのであった。この発見は，その後，ガミオ(Manuel Gamio)によって，アステカやトルテカ時代より更に古い時代のメキシコ谷の文化の一端を示めすものとされ，メキシコの先コロンブス期文化の中に，古拙期（アーカイック）或は形成期（ホーマティブ）といった，一つの文化段階を認め得るようになったのである。1917年，スピンデン（Herbert J. Spinden）が来訪し，彼は，メキシコ谷での古拙期の土偶の発見に対して，新大陸全域に「古拙(Archaic）ホライズン（Horizon)」を設定することを考えた程であった。ガミオは，熔岩流の下の調査を，その後も続けていたが，1922年，カミングス（Byron C. Cummings）博士が来墨し，遂に，クイクイルコ(Cuicuilco）の円形ピラミッドの発見となったのである。[11]

メキシコ谷における古拙期の様相は，熔岩流下の人形土偶の発見，その他に

よって，大いにその内容が判明しつつあったが，メキシコ市郊外のクイクイルコで，カミングス博士とガミオは，人工の巨大な丘を発見した。この丘は，明かに熔岩によって，破壊されたり，一部に熔岩が流れ込んだりしているところから，いずれにしても，極めて古い時期の構造物であると考えられた。そして，1924年から25年にかけて発掘され，ここに頂上部を切りとった円錐形の階段状ピラミッドが発見された。ピラミッド自体は，熔岩や礫石，アドベ，粘土，土などをうまく組み合わせて固められており，構築法の稚拙さや形状の古さを示していた。そして，使用された熔岩やペドレガル地域の地質学的調査は，このピラミッドの年代に関して大きな論争を呼んだのである。つまり，円錐形ピラミッドの年代を600年B. C. からA. D. 200年におくものと，熔岩流の形成を2000年から7000年以前におくものとの二つの見解がわかれたのである。カミングスは，8000年以前に構築されたものという想定をしたが，いずれにしても，クイクイルコでの新大陸最古のピラミッド神殿の発見は，メキシコ谷の先史時代について，時間的な概念を根本的に変えてしまわねばならないことになった。そして，農耕，製陶，巨大建造物などが出現するのは，前4000年頃から前3500年頃と従来考えられていたよりは，はるかに古く考えねばならなくなったのである。そして，1957年の南カリフォルニア大学の発掘で，クイクイルコのピラミッドの中には，四つの付加的なピラミッドが存在しており，その宗教的な，記念碑的な建造物に付属して存在したと考えられる一般民衆の住居群は，ペドレガル一帯の熔岩流の下に眠っていると考えられている。

1932年，メキシコの考古学研究史上，重要なできごとがあった。それは，モンテ=アルバン (Monte Albán) 遺跡の墳墓7が，カソ (Alfonso Caso) によって発見されたからであった。モンテ=アルバンは，メキシコの南西部，オハカ州にあり，カソは，この付近に古い文化を残した，サポテカ族とミシュテカ族に対して非常な興味をもっていた。この文化は，恐らく古期からスペイン征服までの約2000年間以上も続いたものであったろうと推定されていた。モンテ=アルバンを中心とした文化圏は，約32km平方の地域に広がり，神殿，墳墓，ピラミッド，ボール=コート，観測台，広場，石碑など，ひじょうに多くの遺跡

が従来とも知られていたのである。しかも，ここには，「踊る人」(Danzante) の群を浮彫にした石壁があり，南アメリカ，ペルーのカスマ (Casma) 谷の文化との接触を物語る特殊なものも知られていた。また，今まで見たこともない象形文字的なサインが残されていた。このような宗教的大遺跡の中で，墳墓7が発見され，ここから多量の宝石，貴金属を含む副葬品が発見されるに及んで，モンテ=アルバンの文化は，世界的に有名になり，サポテカ文明，ミシュテカ (Mixteca) 文明についての大きな関心が生れてくるようになった。

カソのモンテ=アルバンの発掘においても問題になった，サポテカ以前の居住者達は，一体どんな人種であったのか，また，「踊る人」の像の特長は，現実の人間というよりは，口とか鼻とか，体つき全体にひじょうに特異な表情をもっているが，何故このような人物が，描かれているのか，いわば，メキシコ文化の根源的な問題として把握される問題は，オルメカ文化であった。メキシコの先史時代に広い地域にオルメカ文化が，基礎的な，根源的な文化として広がっていた，という考え方が行われていたが，このオルメカ文化の問題を，はっきりと提案したのは，G. C. バイラントであった。彼は，メキシコ谷で1928年から36年まで，サカテンコ (Zacatenco)，ティコマン (Ticoman)，エル=アルボジィジョ (El Arbolillo) の三遺跡を徹底的に調査した。そして，この三遺跡の資料を基礎として，中央メキシコの層序と編年を確立していった。この編年には，中央メキシコの文明は，古い方から古拙期，トルテカ期，アステカ期となり，これが，現在に到るも基本的な編年となっている。

バイラントは，若くして自殺したが，その業蹟は大きく，ユカタン半島のマヤ遺跡の調査や南アメリカへの調査など幅広く活動を続けた。そして，オルメカ文明の問題や南北両アメリカ大陸の古代文明間の相関関係など壮大な考古学上の問題を解決せんとしていたが，その死は，あまりにも早くおとずれた。

メキシコ湾沿岸で，1938年，トレス=サポテスを代表遺跡として，いわゆるオルメカ文明の本拠の遺跡群の発掘が始った。スターリング (Matthew W. Stirling) によるこの発掘は，オルメカ文明の本質に肉迫するといった意味をもっていたが，遺跡は，ラ=ベンタ (La Venta)，セロ=デ=ラス=メザス (Ce-

rro de las Mesas)，サン=ロレンソ（San Lorenzo）と継続的に拡大されていき，特にトレス=サポテスからは，四個の巨大人頭像が発見された。この人頭像は，15屯或はそれ以上の一枚岩で作られたもので，その顔の表情は，全くメキシコの従来の彫刻の顔とは異なったものであった。厚い唇をもった顔，押しつぶされたような広い鼻，モンゴロイドの目，頭部のヘルメット状のかぶりものなど，頭部全体に毛髪その他の表現はなく，顔は，総体的にニグロ系の表現をもつものであった。また，石碑や柱石にも薄浮彫，高浮彫で彫刻されているが，これらは，旧大陸で古い時期に優秀な彫刻家によって作られたものと同レベルと考えられる程，技法や表現に卓越したものが認められた。しかし，スターリングの行ったこの発見から，オルメカ問題がおこってきた。つまり，ワシャクトウン最古のピラミッドの表面の彫刻は，オルメカ様式であるのは何故か，また，マヤ圏の外側のメキシコ湾岸に，最古の日付をもつ石彫が発見されているが，その表現は，棒と点の組み合わせによる数字表記をもっている。このことは，マヤとオルメカとは，どのような関係をもっていたのか，といったメキシコを中心とした考古学の根本問題が提出されることになった。

スターリングの調査，研究に関して，メキシコの漫画家，コバルビアス(Miguel Covarrubias）の業蹟も忘れることはできない。彼は，オルメカ様式に対して，これは，メキシコ中央高原のトラティルコ（Tlatilco）文化と極めて密接な関係をもつものであることを指摘し，$C^{14}$の年代測定法を応用して，メキシコ谷の編年を行い，最古を2000年B．C．頃と考えた。これは，オルメカ様式を従来の考え方よりは，はるかに古くおくもので，その後の研究を刺激した。

## 6. 結　び

以上，中央アメリカの考古学の発達を地域毎に歴史的に追求してみたが，なお，多くの研究が必要であることを痛感した。特に，メキシコやマヤ地域を除く他の地域に関しては，資料が少なく，十分に究明できない憾みがあった。現在，中央アメリカの各国では，大学を中心として，その国の古代文化，原住民文化への保護と研究が盛んで，現地の大学では，多くの研究者が育成され，大

きなプロジェクトも行われている。後進国なるが故に先進欧米諸国に，その国の歴史的資料まで研究しつくされ，文化財が海外に流出するといった，以前の状態は次第に是正されつつある。民族意識の高まりとともに，現地人学者が多数輩出している現状は，今後の新大陸，それもラテン=アメリカの古代原住民文化の研究には，極めて喜こばしいことといわねばならない。

〔注〕

① Verrill, A. H. *Excavation in Cocle Province, Panama.* Museum of Americam Indian Heye Fundation. Indian Notes and Monographs IV-1. pp. 47～60. New York. 1927.

② Lothrop, S. K. *Cocle: An Archaeological Study of Central Panama. Pt.* 1.: *Historical background. Excavation at Sitio Conte. Artifacts and Ornaments.* Peabody Museum American Archaealogy and Ethnology VII. Cambridge 1937.

③ 貞末堯司，中米における古代石造彫刻品について，城西経済学会誌，第8巻3号，1973年.

④ 貞末堯司，前掲 pp. 412～7.

⑤ Gomez, L. D. *Exploraciones arqueolgicas en San Agustin.* Revista Colombiana de Antropologia. Suplemento No. 1. Bogota. 1964.

⑥ Squier, E. G. *Nicaragua: its people, scenery, monuments and the proposal interoceanic canal* 2. vols. New York 1852. *Observations on the Archaeology and Ethnology of Nicaragua.* Transactions of American Ethnological Society III. Pt. 1. New york. 1853.

⑦ Stephens, J. L. and. F. Catherwood. *Incidents of Travel in Central America, Chiapas and Yucatan* 2 vols New York. 1841.

⑧ Thompson, E. H. *Archaeological Researches in Yucatan.* Peabody Museum American Archaeology and Ethnology III. Pt. 1. Cambridge. 1904.

⑨ Ruz Lhuiller, A. *Exploraciones en Palenque.* Anales del Instituto Nacional de Antropolgia e Historia V. pp. 47-66. Mexico. 1952

⑩ Proskouriakoff, T. *Historical Implications of a Pattern of Dates at Piedras Negras, Guatemala.* American Antiquity vol. 25. Pt. 4. pp. 454-75. Salt Lake City. 1960.

⑪ Cummings, B. C. *Cuicuilco and the Archaic Culture of Mexico.* University of Arizona Bulletin IV-8, Tucson Arizona. 1933.